

## 間宮不二雄の学校図書館論

－山形市男子国民学校の学校図書館実践に注目して－

國 枝 裕 子

MAMIYA Fujio's Thought on School Library : Focusing on the Educational Practice at Yamagatashi Danshi Kokumin Gakko

KUNIEDA Yuko

キーワード：学校図書館 間宮不二雄 山形市男子国民学校

**概要：**本稿では、近年の図書館史研究において日本図書館学研究の基盤確立の中心的位置にあったと評される間宮不二雄の学校図書館論を明らかにすることを課題とした。間宮が『園研究』に発表した論考からは学校図書館への強い関心が確認され、また大いに参考とし影響を受けていた図書館の存在を指摘し得た。考察の結果、彼が指導した山形市男子国民学校の学校図書館実践の背景には、「学校図書館」固有の意義を常に意識化し、学校に図書館を設置する意味を積極的に見出そうとした間宮の実践志向の学校図書館論があったことが明らかとなった。

### 1. はじめに

間宮不二雄(1890-1970)は、日本の図書館における整理三大ツール(NDC, NCR, NSH)の成立を主導した青年図書館員聯盟の実質的な主宰者であり、日本初の図書館専門商社である間宮商店を設立した人物である<sup>1)</sup>。青年図書館員聯盟は1927(昭和2)年12月に設立され、間宮はその書記長に就任していた。1944(昭和19)年の解散までの間、同聯盟の機関紙として、1928(昭和3)年1月から『園研究』を発行し続け、間宮はその発行責任者も務めていた。書記長という肩書きながら、実質この聯盟のトップの役割を果たしたとされる<sup>2)</sup>。多くの図書館関係の著作や論考を発表しているものの、それらは正統な図書館学の学術書との位置づけはなされず、図書館用品の商人、出版社間宮商店の代表、図書館員のパトロンとして「外から図書館を愛した人」との評価が一般的である。ただし、最近の研究では、間宮を『図書館雑誌』、『園研究』の誌面構成等の卓抜さを軸に、「研究者」と評価し、彼が日本図書館学研究の基盤確立の中心的位置にあったとする新たな見方も出つつある<sup>3)</sup>。

しかしながら、こうした図書館学研究者による

先行研究の中では、彼が抱いていた学校図書館への強い関心を研究対象としたものは少なく、近年では、参能哲郎による言及があるのみである。参能は「間宮不二雄の図書館理論の結論は理想的な学校図書館の経営論に至った」ことを指摘している<sup>4)</sup>。ただしこの指摘は、晩年1970年の間宮の講演記録から、彼が「山形の小学校の実践を紹介しながら、これからの図書館は公共と学校図書館が手を組んで小学生からの図書館利用指導が必要であることを説いていた」ことが確認されているにとどまる。

一方、学校図書館史の先行研究においては、間宮が1939(昭和14)年11月以降、山形市男子国民学校の学校図書館経営の指導にあたった際の活動が、戦前日本の先駆的な学校図書館実践として取り上げられてきた。例えば塩見昇は、この実践を「図書館学の理論と技術が学校現場で実践的に受容された希有な例」と評価していたし<sup>5)</sup>、清水正男も「山形型」と名づけその実践を日本の学校図書館発展の一過程として位置づけていた<sup>6)</sup>。また、福永義臣も同校の学校図書館を紹介しているが<sup>7)</sup>、これらの先行研究においては、実践の内実や、それを支えた間宮の学校図書館論については

詳しく解明されていない。

そこで、本論文では山形市男子国民学校の学校図書館の支柱となった指導者間宮の学校図書館論を明らかにすることを課題とする。戦前日本において学校図書館は法的根拠を持たず、一部の先進的の学校を除いては、設置されたとしても形骸化していたものが多く、初等教育において十分に活用されることはなかったのである。そのような時代に、「間宮不二雄の指導において、図書館経営法と技術が学校に受容された」<sup>8)</sup>と高く評価されるのが山形市男子国民学校の学校図書館であったとするならば、この学校図書館を指導した間宮の学校図書館論を分析することで、何が学校図書館を有効に成立せしめる要因たるかを探る必要があると考えられるのである。それは、1953(昭和28)年の学校図書館法の成立によって、学校図書館は「学校教育において欠くことの出来ない基礎的な設備」と位置づけられたにも関わらず、学校図書館が「学校の教育課程の展開に寄与する」ものとして十分に活用されていない今日の状況を踏まえれば、なおのことである。こうした問題意識のもと、以下詳しく検討を進めていきたい。

## 2. 『園研究』に見る学校図書館

### (1) 『園研究』と間宮

まずはじめに、間宮が発行責任者を務め主導していた青年図書館員聯盟の研究発表機関誌『園研究』における学校図書館の関連論考を確認しておきたい。本誌は1928(昭和3)年1月の創刊以来、1943(昭和18)年の第16巻までが1万ページにわたって発行されたが、この聯盟は理論の発表の場にとどまらない活動を追求して、中央および地方当局への意見書の提出等による働きかけや、地方図書館の支援など、積極的に図書館界最前線で行動した団体であった<sup>9)</sup>。この雑誌の誌面構成に関しては、充実した内容の論文、索引等に関する評価が高く<sup>10)</sup>、学校図書館に関した論考も発表されていた。【表1】に、学校図書館関連の論考をまとめてみると、創刊号から15年間にわたって、計40本のもものがあげられる。なかでも最も多いのは間宮によるもので、この雑誌を主導していた彼自身がやはり学校図書館について強い関心を寄せて

いたことを示している。青年図書館員聯盟の活動において、「間宮氏は大阪の間宮商店3階に設けられた青図聯事務局に、毎土曜日ごとに集まっては議論をたたかわす若い学究達に、そのつと適切な研究上の指示を与え、不勉強について厳しく指摘した。山下栄氏の書かれているところによれば筆をとって論文の原稿に手を入れることさえあった」<sup>11)</sup>という。また、聯盟の事務局があった間宮商店2階には、間宮の手によって収集された約3,000冊の内外の図書館学文献が間宮文庫として収集され<sup>12)</sup>、会員は自由に利用可能であった。こうした状況を鑑みるに、間宮がこの聯盟の理論的基盤を支えていたことは明らかである。

### (2) 学校図書館関連の論考

この聯盟は、学校図書館に関して1938(昭和13)年『園研究』誌上で「学校図書館改革意見書」と題し、次のような主張を発表している。「学校図書館ハ断ジテ学校教育ノ附属機関タルベキニアラズシテ、有用欠ク可カラザル学校教育ノ一部ヲ形成スベキモノ」であるからこそ、その「充実ト完備トハ各種学校教育ニ於ケル全面的要求タルベク、教育制度ノ改革ニ此ノ一事ヲ看過セバ、他ニ如何ニ整然タル体系ト内容トヲ持ツト雖モ、九切ノ功ヲ一簣ニ欠クノ憾ミヲ免レズ」<sup>13)</sup>。ここでいう「学校図書館」とは、高等教育諸学校図書館をも含めたものであり、今日的な意味合いでの小中高等学校の図書館よりも広義の概念ではあるが、そのいずれにおいても単なる「附属機関」ではなく、学校教育にとって不可欠のものであると定義していることは特筆に値する。この主張に基づき、学校図書館に関する規定を学校令中に制定し、小学校から大学に至るまで学校図書館の附設を必須とすること、さらに学校図書館員の身分、職能を法的に保障することなどを掲げた改革の要領7項目が挙げられている。とくに初等教育に関わる第二項には次のような具体的提言が盛り込まれていた。

- イ. 小、中学校令中図書館規定ノ制定ニ関スル件  
小学校並ニ各種中等学校令中図書館ニ関スル規定ヲ設ケ各学校ニハ必ズ図書館ヲ設置スベキコトヲ定メ、之ガ目的、職員、経費、

【表1】『園研究』に掲載された学校図書館に関連する論考一覧

巻号	発行年月日	論題名	執筆者
1 1	1928/ 1/31	学校園 ニ関スル若干ノ考察	竹林熊彦
3 2	1930/ 4/30	町村学校園 経営ノ實際—村立明木園経営ノ实例—	伊藤新一
3 2	1930/ 4/30	学校園ノ任務	(巻頭言)
3 3	1930/ 7/31	学校園経営概論 (上-1)	植村長三郎
3 3	1930/ 7/31	町村学校園 経営ノ實際—村立明木園経営ノ实例—【中】	伊藤新一
3 4	1930/10/31	学校園経営概論 (上-2)	植村長三郎
4 1	1931/ 1/30	学校園経営概論 (上-3)	植村長三郎
4 2	1931/ 4/30	学校園経営概論 (下)	植村長三郎
6 1	1933/ 2/23	文部省ワ図書ノ形態オ知レリヤ?	問宮不二雄
6 4	1933/12/10	児童ノタメノ図書目録必要論	仙田正雄
6 4	1933/12/10	園ト学校教育トノ関係 L. Stanley Jast	竹林熊彦
7 2	1934/ 4/30	学校教育ノ現状ト園事業	問宮不二雄
7 4	1934/10/30	児童図書目録要論 附児童図書件名標目表 (1) 批判	三宅千代二
9 1	1936/ 1/30	百言一行ニ如カズ——学校園ト公共園ノ連携——	問宮不二雄
9 3	1936/ 7/20	義務教育延長ワ進歩カ退歩カ	(巻頭言)
10 1	1937/ 1/20	『小学国語読本』巻九ニ掲載サレタ課題「園」	(巻頭言)
10 3	1937/ 8/25	“小学国語読本、巻九ニ掲載サレタ「園」ニツイテ” 会員各位ノ意見	
		所感	坂本章三
		将来ノ改訂コソ興味アリ	小野則秋
		館員ノ立場カラ見テ結構	井上忠三
		児童図書室ノ紹介ガ欲シイ	石橋孫一郎
		本課ノ教授ニ就イテ	中尾徳蔵
		賛否両面観	富永牧太
		改訂シ度イ点	服部五郎
		改訂シテ貰イ度イ点	多田光
		学校園側カラ観ル	村上清造
		希望ト注意	問宮不二雄
小学読本ノ「園書館」	竹林熊彦		
関係文献目録	伊藤新一		
11 1	1938/ 1/30	学校図書館改革意見書	青年図書館員聯盟
11 2	1938/ 5/30	学校園教育私考	中尾徳蔵
11 4	1938/12/31	支那小学教科書ニ現レタ園関係教材ト挿絵	三宅千代二
11 4	1938/12/31	三大運動ノ提唱	青年図書館員聯盟
12 1	1939/ 3/31	図書及園利用法課程 (1) 小学校ニ於ケル図書愛好精神ノ涵養ト図書利用法指導ノ本質A.L.A.小学校及下級中学校小委員会報告	問宮不二雄
12 4	1939/12/30	学校ニ於ケル図書及園利用法教程——A.L.A.学校委員会報告, 1922—— (3-終)	問宮不二雄
13 2	1940/ 6/30	山形市男子高等小学校文庫ノ設備——佐藤昌二氏ノ美挙——	問宮不二雄
13 4	1940/12/31	山形市男子高等小学校文庫ソノ後ノ状況(※校長武田儀美の報告を含む)	問宮不二雄
14 1	1941/ 3/30	件名カード目録ノ件名一覧表山形市男子高等小学校園	問宮不二雄
14 3	1941/11/30	山形市男子国民学校文庫 (※校長武田儀美の報告を含む)	問宮不二雄
15 1	1942/ 5/15	児童文化運動ト児童園	西藤寿太郎
15 4	1943/ 4/20	「山形市男子国民学校園経営ノ實際」ヲ読ミテ	西藤寿太郎

設備、管理等学校図書館ニ関スル準則ヲ制定シ、以テ小、中等学校教育ヲシテ図書館ニヨリ自学的教育ヲ加味シテ中正ノモノヲラシムベキナリ。

ロ. 教則ノ改正及ビ自習科新設ニ関スル件  
教則ヲ改正シ小学校中等学年以上ニ自習科ヲ新設シ、図書館ヲ利用シテ各科ノ自習法ヲ実習セシメ、以テ学校卒業後ノ自己教育ノ基礎ヲ涵養スル共ニ教科書外ノ知識ヲ獲得セシムルベキナリ。

ハ. 小、中等学校教員資格ノ一ニ図書館ヲ必須科トスルノ件  
師範学校並ニ高等師範学校ノ教科中ニ図書館科ヲ置キ、教員ヲシテ学校図書館管理ノ大要ト之ガ利用トニ必要ナル知識ヲ習得セシメ、更ニ教員検定試験科目中ニモ此ノ一科ヲ加ヘ総ジテ図書館科ヲ以テ教員資格ノ必須条件トナスベキナリ。

ハの内容は師範学校への図書館科設置を求めるものであるが、聯盟は1934（昭和9）年の段階ですでに「国定教科書ノ改訂及ビ師範学校規定改正ニ関スル建議書」を出しており、それを強調したものであった<sup>14)</sup>。学校図書館を使いこなすには、指導者たる教師こそがまず図書館について学ぶ必要があると考えられていたのである。またさらに、自学を重視しその具体化を図るために、「国定教科書中ニ出典オ示シ、各巻ノ終リニワ関係参考図書目録オ附載セシムベシ」ということも提唱していた<sup>15)</sup>。「折角教科書ニヨッテ浮ビタル疑問ノ解決方法タル、他ノ参考資料ノ利用法オ教エルコトナク」という状態を批判しており、学校現場の教育方法の中身にまで言及しているものであった<sup>16)</sup>。この聯盟が強く学校教育への関心を有していたことを端的に現している。このことはこの団体の主導者であった間宮の学校教育、学校図書館への関心の高さを改めて裏づけてもいるのである。

### 3. 明木図書館からの影響

次に、間宮の山形での学校図書館指導を論ずるにあたり、その間宮が大いに参考とし影響を受けていた図書館があったことを指摘しておかねばな

らない<sup>17)</sup>。それは伊藤新一によって先駆的な実践が行われていた山口県の明木図書館であった。間宮は「感銘を受けた圍界の二人者（伊藤新一先生と高津半造先生）」<sup>18)</sup>という論考を発表しており、さらに上述の『圍研究』に明木図書館の実践報告が掲載されるに当たっては「編者ノ言」として、紹介文を附してもいた<sup>19)</sup>。

この図書館については、小原国芳がこの地の新教育運動の一環として、『日本の新学校』<sup>20)</sup>の中でも取り上げている<sup>21)</sup>。費用や設備の悪条件を乗り越え、充実した図書館経営を行なっている同図書館を称え、小原は「要するに人」であるとして、実務に当たった伊藤の熱意に敬意を表していた<sup>22)</sup>。1906（明治39）年11月1日創立の明木図書館において、明木小学校准訓導であった伊藤は、1911（明治44）年に別の小学校へ転出するも、1918（大正7）年に再度明木小へ帰任し、1956（昭和31）年まで同図書館経営に尽力した人物である。「一般の教師が兼務で図書館のしごとにあたる限りでは、それほど多くを望むことには無理があった」<sup>23)</sup>とされるが、この時期に、単なる大人のための通俗図書館としてだけでなく、学校図書館の運用をも果たしえた側面を忘れてはならない。

明木図書館での「児童ニ対スル運用」<sup>24)</sup>の方針は、「小学校教育ニ於テ児童ノ読書力ヲ養成スルコト、相俟ッテ読書ノ趣味習慣ヲ養ヒ、更ニ進んで研究的態度ヲ馴致サセル為メニ此ノ時代ノ児童ニ対シテ圍的訓練ヲ行ヒ将来圍利用ノ基礎ヲ養ヒタイ」と考えられていた。では、同図書館の学校図書館としての機能はどのようなものであったのだろうか。その特徴は具体的に以下の四点にまとめることが出来る。第一に、「児童司書制」が導入されていたこと、第二に指導者としての学級担任教師の重要性が強調されていたことが挙げられる。とくに伊藤は「唯漫然ト児童ヲ図書館ニ放任シテ顧ミナイ」例が少なくないということを問題として取り上げ、指導者の存在が重要であることを繰り返し説いていた<sup>25)</sup>。「児童ノ知能ニ対スル理解ガ十分デアルコト、小学校ノ教材ニ精通シテ居ルコト、学習事項ト連絡ヲ保タセ得ルコト、又児童ガ課外読物カラ得タ思想感情ヲ発表サセル

上ニ余程ノ便宜ガアル」という点で、学級担任こそが、学校図書館活用の要となると考えていたのである。さらに、第三の特徴として、「閲覧カード」、「読書の跡」という小冊子の存在がある。「閲覧カード」は、読んだ本の書名や所感を書き留めさせることで、読書指導へとつなげるという意図が込められていた。またさらにこれよりも詳細に、読んだ本の書誌情報や所感を記させ、「系統的な読書が自然に順到される」ように企図されたのが「読書の跡」であった。それは、単に読むだけで終わらせるのではなく、教師の指導のもとに読書指導を行うことが想定されていたのである。一方で、在学中の教科との関連にも十分配慮がなされていたことが、同校の作成していた目録から明らかである。この点に関して、「児童学習参考書手引」の作成が第四の特徴として指摘出来る。「児童学習参考書手引」は、「各教科各題目の学習参考書の目録を作製して児童学習の手引に資して可」として、【図1】のような例が示されているが、図書の分類も「学科別（修身、読方、綴方等）」に行われ、各教科と関連づけた利用が目指されていたのである。これは、教師である伊藤が図書の内容を把握しているからこそ作成しえた目録である。教科の学習内容、図書の内容どちらにも精通していなければこうした目録は用意されることはないのである。学校図書館の活用に対する伊藤の熱意が生み出した目録であったと言える。

【図1】明木図書館の「児童学習参考書手引」  
 出典：伊藤新一「町村学校図 経営ノ実際—村立明木館経営ノ实例—【中】  
 『圖研究』第3巻第3号、1930年7月、332—333頁。

部	種	目	見	堂	参	考	書	備	考	
◎第5 修身										
17	自	信	(吉田)	編	「読書先生の少年時代」 「少年吉田編年録」 「修人の幼年時代 第4編」 宮「読書」 「読書先生其年」 「読書先生ノ肖像」 「読書先生」 「松平村塾」ノ寫真			特別閲覧室—読書先生— 図— 参— 考— 書— 多— 数— 詳— 列— ス		
◎第6 理科										
31	書				「自然界の図(物、力、距離)」157頁—206頁 「読書先生の物産集」91頁—105頁					
◎高1 綴方(下巻)										
27	鳥	の	翼	と	鳥	の	脚	「自然に於ける動物の生活」 「鳥界に於ける空中動物園」 「鳥界の動物學」 「珍しい鳥の動物園」 「鳥界の鳥山學」 「百種百種鳥山の世界」		

図1

#### 4. 山形市男子国民学校の学校図書館実践

##### (1) その特色と間宮の指導

では次に、間宮が指導にあたった山形市男子国民学校の学校図書館について見ていきたい。間宮と同校図書館との関わりをまとめると、【表2】のように示すことが出来る。同校の「教育指針」は次のようなものであった<sup>26)</sup>。

準備段階：図書館で自学的に先づ知る（みる、しらべる）

中心段階（錬成段階）：知ったものを練る（考へる、勘じる）

発展段階：夫等を家庭に、学校に、社会に力強く実践する

単に読書趣味の涵養を図る場所としての学校図書館ではなく、自らの疑問を解決するために利用し、知識を増やすだけでなくそれをもとに「考へる」こと、そのうえで「実践する」ことが学校図書館を活用した学習だと考えられていたのである。それでは、この「教育指針」に基づいた学校図書館とはいかなる特色を有し、間宮の指導はどのような学校図書館の実現へと結びついていったのであろうか。それは以下の四つの点に整理することが出来る。

##### ①「件名カード」の整備による学校図書館を活用した学習

まず、間宮の指導開始当初から最重要事項として取り組まれたのは「件名カード」作りであった。それは、【図2】に示すようなカードによって編成された学習主題別関係文献目録である。25名の全教員によって作り上げられたものであり、全校的な学校図書館実践への熱意を具現化したものである<sup>27)</sup>。同校を視察した西藤寿太郎は、当時の一般的な学校図書館の状況を「結局児童文庫施設トイウモノハ何処マデモ課外的デアリ、趣味的デアルニ止マリ、学校教育ノ本質ヲナス教科活動トハ何等ノ有機的結ビツキノナイモノデアルトイウ様ナ圍觀ヲ持タシメテ今日ニ至ツタ」と憂慮していた<sup>28)</sup>。その彼から見て、同校の学校図書館は「本来ノ機能ヲ確實ニ掘ミ取ツタ理念ヲ打樹テタ」と評されているが、とくに高く評価されたのはこの「件名カード」で、「之デ始メテ研究精神ヲ育て上

【表2】 山形市男子国民学校図書館の沿革

	年	月日		
山形市高等小学校	1939	(S.14)	春	山形市出身の篤志家佐藤昌二のもとに、恩師原田一男来訪し、山形市高等小学校新校舎へ文庫設立のための資金提供を依頼。佐藤、直ちにこれに応じ、2,000円を寄付。
			11月10日	図書館開館式。広さ37坪、閲覧卓10、腰掛60、図書730冊及び書棚が設備される。
	1940	(S.15)		玉井彌平（佐藤商事合資会社の共同出資者）を通じ、間宮不二雄へ学校図書館の指導が依頼される。
			1月19日	間宮、小学校を訪問し武田儀美校長はじめ教師らと今後の方針等について検討。全校生徒に対し、「文庫利用ヲ強調シ、自学自習ノ風ヲ起スコトニ就イテ数十分ニ亘ッテ講演」。佐藤、五カ年計画で毎年500円ずつ支援することを約束。
			5月	職員会にて図書館施設経営に関する要項プリント配布。意見交換。
			7月	件名カード目録使用開始。
			7月中旬	佐藤寄贈157冊到着（計1090冊）。
山形市男子国民学校	1941	(S.16)	4月1日	「山形市男子国民学校」と改称。
			5月18日	佐藤、間宮、玉井三名揃っての学校訪問。
	1942	(S.17)	9月20日	三年間の取り組みを『山形市男子国民学校園経営の実際』として発表。
	1944	(S.19)	3月	蔵書数4300冊となった。佐藤が出征中も、毎月60～70冊の図書が、三越書籍部の玉井を通して届けられていた。
	1945	(S.20)	10月15日	進駐軍に接収された際、図書館施設の一部及び図書は一旦山形市第五小学校に移された。
山形市立第一小学校	1946	(S.21)	3月11日	山形市立第一小学校に移された。その際、「軍国主義、超国家主義、神道に関係ある」ものは焼却された。
	1947	(S.22)	10月	佐藤来校。図書館新設の挙を聞き、援助を約束。
	1949	(S.24)	秋	間宮来校。以後、間宮の指導のもとに、分類の切替、基本目録作成、児童の研究奨励のための佐藤文庫賞（のちに敬学会賞と改められる）の設置、などが進められた。

出典：以下を元に作成。山形市男子国民学校『山形市男子国民学校園経営の実際』山形市男子国民学校、1942年、5-7頁、15-16頁。山形市立第一小学校『佐藤昌二さんと第一小学校図書館』敬学会、1956年、10-15頁。山形市教育史編纂委員会編『山形市教育史』第2巻、山形市教育委員会、1971年、400-401頁。間宮不二雄「山形市男子高等小学校文庫ノ整備－佐藤昌二氏ノ美挙－」『園研究』第13巻第2号、135-141頁。

「ゲル道具ガ与ヘラレタ」<sup>29)</sup>と称賛されていた<sup>30)</sup>。

間宮は明木図書館が活発に利用される要因には「児童学習参考書手引」があり、各教科各題目との関連を考慮して作られたこの目録にこそあると考えていたのである。

教科書ニ含マレテ居ル一切ノ題材ヲ抽出シ、之ニ関連スルモノオ蔵書中カラ探索シ、両者オ結合セシムベキ件名目録カードオ完成シ、

教科ト文庫蔵書トオ有機的ニ結び付ケ、学校教育ノ組織ノ中ニ文庫ノ存在オ織込ムコト、ツマリ文庫オ学校施設並ニ教育方策ノ一部分タラシメルコトニスル<sup>31)</sup>

このような考えに基づいて作られた「件名カード」の一例が【図2】であるが、【図1】に示した明木図書館の「児童学習参考書手引」と比較すると、「児童学習参考書手引」が教科書の課を

【図2】山形市男子国民学校図書館の「件名カード」

出典：「山形市男子高等小学校文庫ソノ後ノ状況」

『圖研究』第13巻第4号、1940年12月、316頁。

④ マン シ ュ ウ		件名	③ 満 洲	教科書	①高1. 地 p5-26; 史 p149; 181; 184; 193 ②高2. 地 p34; 46; 83;		
著 者	標 題	巻 頁	図	請求記号	請求記号		
◎石 森 延 男	◎満洲の美談	◎全	①✓	②2	224		
"	満蒙の風物	全	✓	2	225		
"	生きようとする姿	全	✓	2	226		
"	満洲史話	全	✓	2	227		
"	大平原めぐり	全	✓	2	228		
"	満洲新産誌集	全	✓	2	229		
堀 富 猪 一 郎	昭和國民課本	208-20	✓	1	10		
"	満洲建國課本	全	✓	2	248		
東 亞 問 題 研 究 會	満洲國産業要覧	全	✓	2	53		
仲 康 照 久	世界地理風俗大系、満洲篇	全	✓	2	18		
	世界都市大観篇	1-23	✓	2	44		

吉松第一  
松本豊三  
三久  
満洲國の地理歴史  
世界地理風俗大系・世界人類大観  
三久  
三久  
二〇二  
二五  
五九

注意：マッドノ美術部宛（凸版）ノ本誌第2巻 p.140頁ヲ参照。 大サ：10×15cm.

図2

ベースにした分類であるのとは異なり、まさに「件名」による分類であることが注目される。つまり、【図2】の例で見ると、「満州（マンシュウ）」という事項については、1年の地理にも歴史にも、また2年の地理にも関連した学習項目であることが示され、学年や教科の枠を超えた横断的な学習が促進されるようなカードとして作られているのである。また、請求記号が記されている点でも、問宮の図書館学の理論が活かされ、利便性の点において明木図書館のものよりも発展した内容となっていることがわかる。整備されてから2年後には、子供たちの利用も頻繁になり、「この件名カードの使用こそ学校園活用のバロメーターであるとの信條の下に研究工夫をして」いたという<sup>32)</sup>。1年目に作られたカードを完成版とするのではなく、継続的な見直しによってよりよい件名カード作りが目指されていたのである。同校の校長武田儀美の報告によれば<sup>33)</sup>、教師たちにとっても、このカード作成にあたることで「児童図書並に図書館に関する理解が一層深まった」。

この件名カードが整備されたことによって、「課外宿題とか一人一事研究等の研究を課する」場合に件名カードの利用指導を行なうという実践や、「研究ノート」と名づけられたノートを使って、子ども自身が興味を抱き、図書資料を用いて調査した内容をまとめるという自学的学習も深められた。そしてこうした研究成果は「児童研究発表会」や「学級での研究会」という形で、個々人の知識の習得に止まることなく他の子どもたちにも還元されていたのである。

②学校図書館運営のための協力体制の構築

このような件名カード作成にあたって、問宮の指導のもと、学校図書館運営のため教師たちによる協力体制が整っていった。例えば職員会では「経営の基本大要と、本年度実施重点とを明らかにし、本館施設事業への全幅的協調」が図られ、「他園経営当事者との間に意見交換等」などが行なわれていた。同校で教師を務めていた渡辺円蔵は、当時の様子を次のように回想している<sup>34)</sup>。

閲覧方式は開架式、図書分類はNDC、それ

に件名標目、件名カード等、……今からすれば何でも無いことだが、その頃では、突拍子もないことで、日本でも珍しかったらしい。経営方式が余にも現実とかけはなれていたので、いろいろ問題もあった。例えば、開架式については職員間でもんだし、NDCについては他の図書館のライブラリアンとも議論した。件名カードにいたっては、全職員、半年間の労作、しかも、日常の仕事の合間を見付けて。修理についても鉋やきりから、補修布や糊の類まで専門的に十分考えられた品物だったので、とても能率が上ったし、生徒も喜んで毎週一回ずつやってくれた。(中略) これらの経営や修理の技術は間宮不二雄氏(佐藤さんの親友で、当時、在大阪、図書館用品一切の商店経営)の熱心な直接的指導であった。

教師たちにとって未知の分野である学校図書館作りにあたって、間宮が非常に大きな役割を担っていたことが窺える。また、教師のみならず、同校では1941(昭和16)年から「課外研究部」の中に「園研究部」が設置され、教師と児童とが一体となって「園に関する一切の研究」を行っていた<sup>36)</sup>。その研究に用いられた図書館学の参考書の中には、上述した明木図書館の伊藤新一の実践報告書『町村学校園経営の実際』も含まれており<sup>37)</sup>、やはり間宮の指導によって明木図書館の実践が大いに参考にされていたことがわかる。まさに全校あげて学校図書館を作り上げていこうとの熱意に満ちていたのである。

### ③学校図書館運営の指針やシステム構築の重視

間宮の同校に対する指導において注目されるのは、学校での教員移動があっても図書館運営に決して支障の出ないような学校図書館運営の指針やシステムを構築することを重視していた点である。それは、「客観的科学的経営方式」の採用が図られたと換言出来よう<sup>38)</sup>。間宮は言う。「従来ノ学校附設文庫ワ係員ノ個人的熱意ノ有無ニヨッテ盛衰ヲ来スコトワ例外ナキ事実デアル」<sup>39)</sup>。だからこそ、「校長サンヤ先生ノ変更又ワ更迭ガアッテモ盛衰ノ無イ様ニ組織立テルコトヲ主眼トシ」ていく学校図書館の発展が望ましいのであ

る、と。別稿でも次のように繰り返している<sup>40)</sup>。

私ワ学校附設園ト学校教育トガ従来ノ如キ園経営方法デハ全ク遊離シタ存在デ従ッテ形骸的存在ヲ認メテモ両者ガ緊密ニ又有機的ニ結合シテ真価オ發揮シテ居ルモノワ無イ。尤モ園人ノ異常ナル人が居テ上記ノ如キ形オ呈シテ居ル処ワ無イデワナイガ、ソレワ多クノ場合ソノ人ノ個人的影響デ、ソノ人が去ツタ趾ニワ元ノ木阿弥ニ遷化スル可能性ガ多分ニアル。(中略) 学校教育ノ組織ノナカニ園機能が織込マレ如何ナル人ニヨッテ代ワラレテモ園ガ学校教育ト常ニ唇齒ノ関係ニアル様デナケレバナラナイ

明木図書館における伊藤のような一個人の熱意によって成立していた実践を認めつつも、学校教育の中に真の意味で学校図書館の機能が根づいていなければ、その永続は困難であることを間宮は見抜いていたのである。また彼は、初等教育が上級学校への準備教育に終始し、「児童オシテ事象ニ対シ自カラ疑問オ起サシメ、自問自答シ、或ハ字典、百科事彙ニ就キ、或ワ其他ノ参考図書類ヲ使用シテ自カラ解クノ術オ知ラズ」という状況にあることを問題視していた<sup>41)</sup>。それゆえ、この山形での学校図書館には、「是非学校ニ於ケル教壇教育ト附設ノ文庫トガ渾然一体トナッテ真ノ国民教育ガ成就サレルコトオ園ウモノデ、従来ノ如ク教壇教育ト附設文庫トガ各独立シタ働キオナス形態オ、本文庫ノ活動ニヨッテ打破シ」たいとのねらいが明確にあった<sup>42)</sup>。

### ④恵まれた経費による長期ビジョンでの学校図書館作り

さらに山形市男子国民学校の学校図書館にとって、佐藤昌二という篤志家による経営面での援助が途切れることなく続けられていたことも、特筆すべき事柄である。間宮は常々、「創立シツバナシデワ駄目ナノデ園ワ活物デアル現状維持ニ止ルコトワ許サレナイ」と考えており、確立されていない行政からの学校図書館支援状況を強く批判していた<sup>43)</sup>。たとえ郷里の成功者が寄附を行っても、「多クノ場合殆ド意味ヲ為サナイコトガ多ク、折角ノ寄付モ刹那的ニ終ルコトワ従来ソノ例ニ乏シクナイノデアル。殊ニ園事業ノ如キモノニ於テ顕

著ナルモノガアル」<sup>44)</sup>。学校図書館に限らず、いくつもの図書館が一時的な寄附金によって設立されるものの、その後の経費不足によって衰退していく事例を見てきた間宮にとって、「活物」としての図書館運営は経費の問題を抜き論ずることは出来ないものであったのである。だからこそ間宮は、佐藤が「同文庫が相当程度ニ完備スルマデ援助才継続スル決心ダトノコトデ」<sup>45)</sup>、同校の指導を引き受けた。ここには、間宮の現実的な経営者としての一面も生かされていたのである。

## (2) 間宮不二雄の学校教育観

最後に、こうした同校の学校図書館を支えたのは、次のような間宮の学校教育観であったことを確認しておく必要がある。間宮の小学校教育に対する基本的姿勢は、「小学教育者ヲ、上級進学ト否トワ生徒並ニ其父兄ノ自由意志ニ任セテ、国民トシテ必須ナル智識オ十分ニ教テ、同時ニ自己研鑽オナスコトノ出来ル鍵ヲ与エルコトノミ専念スベキモノ」というものであった<sup>46)</sup>。また、次のようにも述べている<sup>47)</sup>。

学校生徒に、在学中に図書に親しみ、良い習慣を養い、参考書の使い方を修得させておけば、彼等は校門を去った後でも自己の職業の向上に、知識の増量に、又修養のために図書を活用することが可能である。学校園の在り方は、単に読書を奨めるだけでは十分に目的を達したものと云えない。在学中に参考図書の利用法、与えられた教科書の課題を更に他の図書によって広く深く研究する心がまえと、その方法及び実行、疑問の解決の為には、先生や父兄に聴く前に、図書を調べることの便利であり且効果あることを体得させる等のようであればなりません。(山形市男子国民学校園経営の実際、昭和17年(1942)、184 p. 参照)

末尾に、『山形市男子国民学校園経営の実際』を参照するよう促していることからわかるように、間宮の学校図書館論は、山形での実践を通してより強化されていったのである。「自らの疑問は参考書を繙くことによって、自らから解決するのであれば、知識の増量を為すことは不可能で、この習性を涵養させることが教育者の最大の義務

であり全学校へ園を設置した目的である」<sup>48)</sup>とし、学校図書館設置の目的を明確化した。さらに具体的に次のようにも述べている<sup>49)</sup>。

小中学校在学中に「疑問を自らの力によって解決する習慣」、<sup>50)</sup>「教壇で教科書を用いて教えられたことを、関係参考書を用いて、より一層広くまた深く、即ち真理の探求に一步進めるためには、如何に図書を利用すればよいかという、その読書の方法」、また「利用したことによって自ら感受した利益の自認」、これ等を身につけさせることが、学校園設立の真目的でなければならない。

つまり、間宮は「なぜ学校教育において学校図書館は必要不可欠とされるのか」という問題を、追究し続ける人であり、学校に図書館を設置する意味を積極的に見出し、図書館の意義ではなく、学校図書館固有の意義をはっきりと区別して意識化していた人物であったのである。

## 5. おわりに

以上見てきたように、山形市男子国民学校の学校図書館実践の背景には、間宮の実践志向の卓越した学校図書館論と、同校一丸となつての学校図書館の整備や活用への工夫があったことが明らかとなった。間宮は、学校教育において熱意ある教員の存在に頼ることでは成立しなかった学校図書館のあり方を問い直し、その機能を維持発展させられるようなシステムを、いわば日本における学校図書館のモデルともなる実例をこの学校の図書館において実践することを志向していたのだと言えよう。間宮は単に図書館経営法や運用技術の伝道者としての役割を果たしただけではなかった。彼の図書館学の理論や知識だけではなく、その根底にある学校図書館論自体が、職員会での確認や、教科学習と密接に関連づけた「件名カード」作りといった実際の活動を通して浸透し、同校の教師たちに受容されたからこそ、この実践は成立し得たのである。これはもちろん間宮だけの功績なのではなく、実際に子ども達と向き合い、日々の実践の中で試行錯誤しながら学校図書館のより良い利用を模索し続けた教師たちの努力が払われたことは、あらためて強調されねばならないので

ある。また、同校が佐藤からの金銭面での支援を得られ続けたことも、重要である。ただし、学校図書館の真の活用のためには長期ビジョンでの経費が重要であることを痛感していた間宮が指導者として抜擢されたからこそ生かされたものであったとも言える。図書館の利用指導によって、卒業後も図書館を使って自ら課題を解決出来る力を身に付けさせるという子どもの将来を見据えた方面と、学校の教育課程と学校図書館が不可分な関係となり、より豊かな学習を展開させるという方面、この両面での学校図書館の価値を見出し、実現しようとしたのが間宮であったのである。

本論文では、間宮不二雄に焦点をあてたため、山形市男子国民学校の教育実践全体における学校図書館の姿を詳細に検討するには及ばなかった。とくに戦時期という時代背景の中、「錬成」を掲げて行われていたことを考慮する必要がある。間宮は戦後も、山形市男子国民学校の蔵書を引き継いだ山形市第一小学校の学校図書館の指導にあっていたが、戦時期の実践自体への問い直しはなかったのか。件名カードの作成基準は教科書であり、当時の教育に対する根本的な批判には至っていなかったように推察されるが、こうした観点からも、実践の内実を明らかにしたい。またこの実践は『山形市男子国民学校園経営の実際』などによってその取り組みは紹介されているが、当時または戦後の全国の学校図書館への影響は見られなかったのか。そうした点についても、今後検討を進めていきたい。

#### 〈註〉

- 1) 間宮不二雄の経歴については、次を参照。「間宮不二雄先生年譜並に著作年表」(間宮不二雄先生喜寿記念図書館学論文集刊行会『間宮不二雄先生喜寿記念図書館学論文集』間宮不二雄先生喜寿記念図書館学論文集刊行会、1968年)、375-383頁。もり・きよし「外から途書館を愛した人 間宮不二雄」(『図書館を育てた人々；日本編Ⅰ』日本図書館協会、1983年)、132-138頁。石山洋「外野から叱咤激励した図書館用品店主間宮不二雄」『日本古書通信』第890号、2003年9月、20頁。
- 2) 志保田務「間宮不二雄と『図書館雑誌』、『圃研究』」『桃山学院大学経済経営論集』第46巻第4号、2005年3月、12頁。
- 3) 註2)に同じ、1-17頁。
- 4) 「『間宮文庫』(富山県立図書館蔵)設置のあとさき」文献探索研究会・深井人詩編『文献探索2000』文献探索研究会、2001年2月、326頁。
- 5) 塩見昇『日本学校図書館史』全国学校図書館協議会、1986年、138頁。
- 6) 清水正男『わが国における学校図書館発展の研究』ほおずき書籍、1986年。また、草野正名『日本学校図書館史概説』(理想社、1955年、132-133頁)でも、「小説類の閲読傾向より学究的な読書への善導」(133頁)などがあったことが評価されている。
- 7) 福永義臣「わが国における「学校図書館の利用指導」の史的考察〔Ⅰ〕——その前史を中心として(3)——」『図書館学』No.53、1988年9月、27-28頁。
- 8) 註5)に同じ、19頁。
- 9) 武内隆恭「青年図書館員聯盟について」『みんなの図書館』第147号、1989年8月、39-40頁。
- 10) 「圃研究」『図書館用語辞典』角川書店、1982年、447頁。
- 11) 篠原俊夫、松田博、武内隆恭「青年図書館員聯盟の運動」『図書館界』Vol.29、No.1、1977年5月、7頁。
- 12) これらの文献は、1945(昭和20)年3月14日の大阪大空襲によって焼失しており、文献リストの類も残されていない。また、戦後間宮が収集した蔵書は、現在、富山県立図書館に「間宮文庫」として所蔵されており、調査を行ったが、間宮の教育学についての理論的背景の解明に直接つながるものは得られなかった。よって本稿では、間宮の論考そのものを分析することによって、彼の学校教育観を可能な限り解明するということに努めた。
- 13) 青年図書館員聯盟「学校図書館改革意見書」『圃研究』第11巻第1号、1938年1月、3頁。以下煩雑になるのを防ぐため、雑誌名のない引

- 用は全て『園研究』からのものとする。
- 14) 本建議に関しては、福永義臣「わが国における「学校図書館の利用指導」の史的考察〔I〕——その前史を中心として(2)——」『図書館学』No.51, 1987年9月, 38-39頁に詳しい。
  - 15) 青年図書館員聯盟「三大運動ノ提唱」第11巻第4号, 1938年12月, 485-486頁。
  - 16) 註15)に同じ, 486頁。
  - 17) 明木図書館に関しては、国立教育研究所『日本近代教育百年史』第7巻(国立教育研究所, 1974年, 904-912頁)に詳しい。ただし、社会教育史の中での位置づけが意図された研究であり、「学校図書館の側面は一応捨象してみていく」(906頁)とされているため、通俗図書館としての側面から見た明木図書館論である。学校図書館としての機能に注目して明木図書館を論じたものとしては、前掲の塩見による『日本学校図書館史』(44-46頁)、清水正男「わが国における学校図書館の発展過程の研究——とくに昭和前期の指導機能を中心として——」(『信州大学教育学部紀要』第24号, 1976年, 1-13頁)がある。また2008年に入り、図書館界でも「今につながる先覚者」として伊藤新一を改めて評価する研究が行なわれ、『図書館学』No.92に、上野善信「伊藤新一(元明木村立図書館長)に関する一考察」(67-75頁)、福永義臣「伊藤新一・明木図書館の文献露出——地方区から全国区へ、しかし生涯在野の人——」(76-98頁)が発表されている。
  - 18) 問宮不二雄「感銘を受けた園界の二人者(伊藤新一先生と高津半造先生)」『図書館と人生』, 問宮不二雄氏古稀記念会, 1960年, 170-171頁。
  - 19) 伊藤新一「町村学校園経営ノ実際—村立明木園経営ノ実例—」第3巻第3号, 1930年7月, 319頁。
  - 20) 小原国芳『日本の新学校』玉川学園出版部, 1930年, 581-609頁。
  - 21) 註5)に同じ, 46頁。
  - 22) 註20)に同じ, 609頁。
  - 23) 註5)に同じ, 46頁。
  - 24) 伊藤新一「町村学校園 経営ノ実際—村立明木園経営ノ実例—」第3巻第2号, 1930年4月30日, 202頁。この後, 第3号, 第4号に続けて掲載されたこの報告は、のちに『町村学校図書館経営の実際』(1931年)として一冊にまとめられ、「問宮商店」から出版された。
  - 25) 註19)に同じ, 323頁。以下, 明木図書館の特徴については全てこの論考からの引用である。
  - 26) 山形市男子国民学校編『山形市男子国民学校園経営の実際』山形市男子国民学校, 1942年。
  - 27) 註5)に同じ, 137頁。
  - 28) 西藤寿太郎「山形市男子国民学校園経営ノ実際」ヲ読ミテ」第15巻第4号, 1943年4月, 463頁。
  - 29) 註28)に同じ, 463頁。
  - 30) 西藤と同様, 同校の学校図書館を視察した三輪和敏の視察記(「児童図書館の現状及び将来——山形市男子国民学校児童図書館参観記——」『社会教育』第13巻第1号, 1945年1月, 50頁)でも「件名カード」に対する評価は高い。
  - 31) 問宮不二雄「山形市男子高等小学校文庫の整備——佐藤昌二氏ノ美挙——」第13巻第2号, 1940年6月, 139頁。以下, 引用は全て原文のまま。
  - 32) 「山形市男子高等小学校文庫ソノ後ノ状況」第13巻第4号, 1940年12月, 437頁(武田儀美報告箇所)。
  - 33) 註32)に同じ, 310-324頁。
  - 34) 註32)に同じ, 311頁。
  - 35) 渡辺円蔵「あの頃の男国の図書館」(山形市立第一小学校編『佐藤昌二さんと第一小学校図書館』敬学会, 1956年), 83頁。
  - 36) 註32)に同じ, 436頁。
  - 37) 註31)に同じ, 310頁。
  - 38) 清水正男「わが国における学校図書館の発展過程(学校図書館法以前)——とくに明木小から山形小の試行を経て——」『図書館学会年報』第16号, 1970年12月, 43頁。
  - 39) 註31)に同じ, 137頁。

- 40) 問宮不二雄「件名カード目録ノ件名一覧表山形市男子高等小学校園」第14巻第1号, 1941年3月, 29頁。
- 41) 問宮不二雄「学校教育ノ現状ト園事業」第7巻第2号, 1934年4月, 222-223頁。
- 42) 問宮(序文), 註31)に同じ, 435頁。
- 43) 註31)に同じ, 137頁。
- 44) 註31)に同じ, 135頁。
- 45) 註31)に同じ, 136頁。
- 46) 註41)に同じ, 222頁。問宮不二雄が学校教育に高い関心を有していたことは、彼が国語読本に関する痛烈な批判論考をまとめていることなどにも明らかである(「文部省ワ図書ノ形態オ知レリヤ?」第6巻第1号, 1933年2月, 145頁)。
- 47) 問宮不二雄「学校園の在り方」『園とわが生涯・前期』問宮不二雄, 1969年, 23頁。これは、『北海道図書館月報』第28号, 1951年9月, 1頁に掲載されたものの再録である。問宮は, 1922(大正11)年の, A.L.A(全米図書館協会)による報告「小学校ニ於ケル図書愛好精神ノ涵養ト図書利用法指導ノ本質」を訳出しており, 国外の状況にも目を配っていたことがわかる。それは, 「図書及園利用法課程(1)小学校ニ於ケル図書愛好精神ノ涵養ト図書利用法指導ノ本質A.L.A.小学校及下級中学校小委員会報告」として『園研究』に掲載された(第12巻第1号, 1939年3月31日, 25-29頁)。なお, 続く第12巻第2号には中等学校に関する内容が, さらに第12巻第4号には師範学校に関する部分が訳出されている。
- 48) 問宮不二雄「小・中学校園の在り方」『園とわが生涯・後期』不二会, 1971年, 183頁。
- 49) 問宮, 註18)に同じ。

【付記】本稿の一部は, 平成21年度科学研究費補助金(若手研究B)を受けた研究成果である。